
おたく 一直線！

わんちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おたく 一直線！

【Nコード】

N7181B

【作者名】

わんちゃん

【あらすじ】

見た目は不良、頭脳はオタク、その名は『冴木一宏』。彼は現役高校二年生。そして不登校である。しかし、彼が平穏な日々を暮らしていたときに不意に見つけたサイトから、彼の生活は一変することとなる…カテゴリにちゅうもく！

ブログ^o俺の日常（前書き）

あまり自信がありませんが、楽しく読んでくれたら嬉しいです（笑

ベタ全開で頑張るぞ〜！

ブログ。俺の日常

やあ諸君！元気にしてるか？そうか、元気ならよかった。俺はと
いうと……

「あゝ、腹減ったなあゝ」

と、こんな調子である。ちなみに今の時刻は午後8時、もう完全
に夕飯時である。しかし俺は、こんな時間まで朝から飯も食わずに
ネットサーフィンしながら違法コピーしたDVDアニメを見ている。

二次元はやはりいいな。異世界モノから恋愛モノまで、それぞれ
の持ち味や個性が出ていて素晴らしい。特に、最近では恋愛ゲーム
で日々成長を遂げている『ツンデレ』に胸を踊らせるばかりだ。あ
のトゲトゲしい態度から一変したときの、主人公への甘え具合が…
…たまりません！

つと、まあ今の内容で俺がオタクであることは十分に理解して頂
けただろう。ちなみに俺は未だ童貞だ。これといって理由はない。
やたらと慕ってくる後輩や、甘えさせてくれる近所のお姉さんや、
隣の家に住む幼なじみや、再婚したときの義妹などは…

…いない。よってフラグなどハナから立っていないし、両親もちやんといる。(ちなみにここ何年かまともに会話していない)それに、ここ数カ月高校にも行かずに外もでていないため、後輩や近所のお姉さんのフラグもすでに崩れ去っている。

「あゝつまんねえ。なんで生きてんだろ。生まれ変わるならもっと別な生き物になりてえな」

いつもの癖で一人グチる俺。

別に学校がつまんなかったから不登校なわけではない。

ただ、勉強が簡単すぎただけだ。

あとは……外見が不良っぽいという理由で色んな生徒に避けられていたからかな。

まあ、一番の理由は俺がオタクだと知ったからだろう。あれは不覚だった。町内じゃバレるためわざわざ隣町までエロゲーを買いに行ったら、店を出たときにたまたまクラスの女子生徒と遭遇してしまったのだ。もちろん、これを知った彼女はこの外見とのギャップを

面白可笑しくバラし始めましたよ。おかげで散々だ。

「あれ……？」

そんなことを考えながらネットをしていると、不意にあるサイトが目にとまった。

「オタク&引きこもり構成委員会？」

なめてんのかこのサイト？オタクなめんなよこら？

もちろん荒らしてやりましたよ。問い合わせメールを3通くらい送ってやりましたよ……下ネタ打ちまくって。因みに1通目以降は全てコピーして送信。めんどくさいもん。

『一宏ご飯よ……ここに置いておくわね』

母親が部屋の前に夕飯を置いていった。ようやく食事に取りつけるぜ。

しかしこの時の俺は気がつかなかった。この問い合わせメールが、これから俺をとてつもなく苦しめることになるなんて……

ブログ♂俺の日常（後書き）

評価お願いします（涙

1話[♂] コンコン、キツネ（前書き）

評価していただけたら涙を流して鼻をかみながら土下座しますので、
評価お願いすると同時に在住まいの方角を書いていただけると幸いです
です（土下座）

1話。コンコン、キツネ

『お兄ちゃんおきて〜！あさだよ〜！』

ガチャン！

「ふはあ〜」

やはり萌えキャラボイスを目覚ましに起きるのは、最高だな。これのために生きているようなものだ。おっと、挨拶を忘れていたな。おはよう諸君。今日も元気か？そうか、元気ならよかった。俺はというと、見ての通り元気100倍だ。

ただ今の時刻は10月2日の午前10時30分。学校に行くのであれば完全に遅刻だ。廊下に立たされるだろう。無論、俺は不登校であるため関係ない。

コンコン

ん？一体何の音だ？

コンコンコンコン！

さっきより強くなった！？

コンコンコンコンコンコンコンバリンッ！

「おい誰だ……………て窓割れてんじゃねえか！？」

俺の見た物は割れたガラスと…………キツネ？

「コン！」

いやいや、コン！じゃねえよ。まずその手でノックできたとしても、その肉球でガラスを割るのは不可能だろう！？まじでキツネか！？

「コウ〜ン」

ん！？

「お前…怪我してるのか！？」

見ると、キツネの右手？にはワイヤーが食い込んでいて、ドクドクと血が流れていた。

「待つてろ！今直ぐに手当てしてやるから！」

俺はキツネを抱き上げてベッドに寝かせると、手当てをするべく部屋を出ていった。

久しぶりに踏み出した部屋の外。普段は直ぐ隣の部屋がトイレだったから、トイレだけに集中して他の部屋に目もくれなかったが、いざ外に出てみるとあまりの広さに驚いた。いや、おそらく視界が広がっただけかもしれないが、それでもとても新鮮に感じた。

うーん、救急箱はどこだったかな…。一階に行けばあるかな？

俺はゆっくりゆっくりと母親に見つからないように一階へ降りると、居間へ向かった。居間に入ると物入れをまさぐり、目的の物を見つけて二階へ向かった……。ついでにチーズパンと牛乳も持って行った。

「おい？大丈夫か」
「クウーン」

相変わらず血が流れているが、ちゃんと返事ができて良かった。
さて、どうしようか。まずワイヤーをニツパーで切って、その後
消毒してガーゼを当てて包帯を巻けばいいか。

「よし、これで良いか！」

うん、上手く巻けたし良かった良かった。

「お前、腹減ってないか？」

「クウン？コン！」

「そうか、減ったか。じゃあ、これでも食え。」

俺はチーズパンを細かく千切ってお皿にのせ、牛乳を別のお皿に入れてキツネの近くに置いてあげた。

「ハグッハグッ、モグモグ」

良かった、ちゃんと食べてくれている。

「うまいか？」

「コン！」

「そうか。たくさん食べろよ」

それにしても、どうやって二階まで登ってきたんだ？いや、それいぜんになぜこんな場所にキツネが？

「クキューン…スー…スー」

まあ、いつか。今はお腹一杯で寝ちまったから、ゆっくりさせてやろう。

人間は最低だ。

なぜ自分とは違うものを蹴落とそうとするのだろう。

言葉で心を傷つけ、暴力で身体を傷つける。

そしてそんな軽々しい行動が、人間だけでなく多くの生き物を傷つけていく。

そして、優越感に浸るんだ。

『俺はコイツよりも上の存在なんだ』って。それは俺だけじゃない。こいつだってそうだ。普通に考えてワイヤーなんか足に絡まるはずがない。誰かが故意に巻き付けたに決まっている。『自分がされて嫌なことはしない』という小学生の頃から言われていることがなぜ分からないのだろうか？考えられない。

だから今の世の中は失業者が増えているんじゃないのか？表では良い顔をしていても、自分が大きくなるためにはとことん誤魔化し、とことんチクる。そりゃあそんな人間関係築くくらいなら仕事なんか辞めるだろう。それは『根性がないから』ではなく『自分が真っ直ぐに生きてきたこと全てが全否定されたから』だと思う。その点、二次元は素晴らしい。自分の全てを受け入れてくれる。

おっと、話が長くなっちゃったな。だめだ、何もしないでいるとどうしても色んなことを考えちまう。そういや、ここ1週間風呂に入ってなかったな。ちょうど良い、風呂にでも入ってくるか。

俺はキツネの頭を撫でると、着替えを持って部屋をあとにした。

《入浴タイム》

このシーンは未成年の読者様がいるためお見せできません、つつうか作者も気持ち悪くて書きたくありません。

「ふう〜、良い湯だった」

風呂って案外気持ち良いんだな。これからは毎日入ってみるかな。それにしてもキツネは大丈夫かな？ちゃんと寝ていれば良いんだけど……

ガチャ

「……………失礼しました」

あれ？ここ俺の部屋だよな？っていうか、俺んちだよな？なんで

！？なんで俺んちに…

女の子がいるんだよ！？しかもベッドで寝てたし！？

俺はもう一度ドアを開けると、部屋に入っていた。

「そつえば、キツネはどこに行ったんだ？」

確かに俺のベッドにはキツネが寝ていたはずだが？こりゃあ、いよいよ幻覚でも見えるようになってしまったか。

「ふあゝ……おふあよう」

少女が目を覚ませたようだ。先程は驚いていて気がつかなかったが、真ん丸な大きい目、腰まである桃色のサラサラな髪、そしてやや控え目ながらもしっかりとある胸！ああ言いますとも！可愛いん

ですよ！

「あ！おはようございます、一宏さん！」

「あ…ああ、おはよう……で、初めまして」

こうして、俺の非現実的な日々が幕を開けるのであった。

2話[♂]え？タイトル変更！？（前書き）

評価をしていただけたら、涙を流して鼻をかみながらお書きして頂いた方の住む方角に三角倒立します！なので、評価と方角をお願いします（土下座）

2話。え？タイトル変更！？

「ではまず、自己紹介をどうぞ」

俺はとりあえずキツネ？の女の子に自己紹介を頼んだ。

「T県S市から来ました、上田富美子22歳主婦です」

「わかりずらいボケをありがとう。でもこの小説は『新婚さんいらっしゃい』とか『おもい。きり長電話』とかじゃないから普通をお願いします」

「オタク&引きこもり構成委員会から来ました、陽炎^{かげろふ}蓉子^{ようすけ}17歳です！蓉子って呼んでください！」

なるほど、蓉子ちゃんかあ。可愛い名前だな。それよりも気になることがある。

その1

なぜキツネだったのかつつかそもそも人間なのか？

その2

オタク&引きこもり構成委員会とはなんだ？妙に聞き覚えがあるようないな…

「なあ、なんでさっきまでキツネの姿をしていたんだ？」

しばし考え込む蓉子ちゃん。

「うーん、それは難しい質問ですね。まず、我々『オタク&引きこもり構成委員会』は人間が作り出した協会ではありません。どちらかといえば、あなた方の言う『妖怪』が、今の世の中を見かねて作り出した協会です」

うん、ありえないことが今まさに起こったな。まず、目の前の女の子は人間ではないということ。次に、この世に妖怪がいるということ。信じたくはないが、この子がキツネだったということは、前話の後に読者に内緒で話したので間違いないだろう。

「とりあえず、質問に答えてくれてありがとう。次の質問だが、なぜ『オタク&引きこもり構成委員会』：長いからOH委員会とよぶが、そこからなにしに俺んちに？」

それを聞いた蓉子ちゃんは、驚いた顔で身を乗り出してきた。

「なぜって、一宏さんがメールを協会に送ったんじゃないですか！」

メール？メール…めーる…MAIL…あ！？もしかして！？

「メールって昨日俺が3通くらい送ったあれ！？」

「そう！あれですよあれ！」

やつべえええー！！！？あれ下ネタばっか打ち込んで送ったから、まさかこんなことになるなんて……

「なあ、そのメールにはなんて書いてあった？」

それを聞いた蓉子ちゃんは、顔を真っ赤にしてボツボツはなしはじめた。

「え〜っと、 とか とか。。。。とか●●●とか
……恥ずかしいんでもう言いたくありません!!」

まじかよ……。ああ…俺の平穩があゝ（涙
おい、誰だ今『本当は嬉しいくせに』とか言ったやつ。いいか!?
オタクにとって最も大事な物は、誰にも干渉されずに自らの世界を
作り上げることだ!それを見ず知らずの小娘に邪魔されてたまるか
!見よこの部屋を!積もりに積もったゴミ袋、溜まりに溜まったエ
ロゲー、そして溢れんばかりのDVD、マンガ、小説、フィギュア
をおお〜!!

足の踏み場などいらん!必要なのは綺麗な布団、パソコンと机と
椅子だけだああ!!

「出ええてええいいいけええ!!」

「え!?!無理ですよ!」

はあ!?!なんじゃそれ!?

「なぜだあ!?!」

「だって……あなたを構成するまで帰れないもん」

「はあ!?!なんだそ

「というわけで、片付けましょう!」れ……ってはあ!?!」

そして、蓉子ちゃんはどこからともなく掃除機とゴミ袋を取り出すと、

「あつ!？」

という間に部屋を片付けてしまった。エロゲーは全てゴミ袋へ、マンガは全て紙袋に詰めて古本屋へ、そして俺の愛する魔女っ娘マリちゃんのパイナップルは燃えないゴミの袋に投げ込まれていた。そして…そう！今まさにマリちゃんがゴミ捨て場へと運ばれていく！なんとか助けなくては！

俺はマリちゃんを助けるべく、蓉子ちゃんが持った袋に手を伸ばした。そして……避けられた。

「ダメですよー宏さん！これを捨てなくちゃー宏さんは一生構成できなくなっちゃうんですよ!？」

「いいよ別に」

コケッ

あ、コケた。

「ダメです！私が来たからには、意地でも社会に出てもらいますからね!」

そう言って脱兎のごとく走り始める蓉子ちゃん。俺も足には自信があって追いかけてみたものの、階段でつまづいてコケた。

「だめだ…だめなんだよ…。そんなことしたら、この物語の題名が全否定されちゃうだろ…」

俺は溢れ出る涙を拭い、一人グチりながら戻っていった。

部屋に戻ると、そこは不思議な世界ですか？いいえ、そこはトムでもありません。すみません、なんでもありませんでした。そう、なんでもない上になにもなかった。あったのは机、椅子、パソコン、ベッドだった。おそらく、同じ年の男の子でもここまで殺風景な部屋ではないであろう。

「……インターネットでもするか」

俺はパソコンの電源を立ち上げると、インターネットを始めた。とりあえず、2ちゃんの友達にでも今日の出来事を話すか。

『こんにちは、有機野菜さん』

あ、これ友達のペンネームね。ちなみに俺のペンネームはツン太。

少し待っていると、返事が帰ってきた。

『こんにちは、ツン太さん。今日も元気ですか？www』

直ぐ様返事をする俺。

『今日は、なんかわけのわかんない女が我が家に来ていて大変なんすよ（汗）部屋にあったものがほとんど捨てられてしまいました（涙）』

『それは大変でしたね（汗）マリンちゃんは守れましたか？』

『いいえ、見事なまでにマリンちゃんを殺されました（涙）』

『それは辛いですね（汗）私も一度妹にオタグッズを捨てられて大変でした（涙）』

『ええ！？有機野菜さん妹なんかいたんですか！？』

『ええ、義理の妹ですが。でも、実際のところ義妹なんて対して良くありませんよ？（汗）変に意識しすぎて疲れてしまいますし（苦）』

『そうなんですか（汗）でも、有機野菜さんのおかげでまた勇気が出ました！お互い、これから頑張っていきましょう！』

『そうですね（汗）頑張りましょう！（笑）』

その後、一通り会話をしていると蓉子ちゃんが帰ってきたのでパソコンの電源を切った。

「あら、パソコンしていたんですか？」

「まあね。それと、一言お前に言っておきたいことがある」

「なんですか？」

「俺はけして構成などしない！俺はオタクを一直線に突き進んでみせる！」

ふん、どうだ。これでやる気を無くしただろう。

しかし蓉子ちゃんの表情は絶望に悲しむ顔ではなく、やる気に満ちた輝かしい笑顔だった。

「いいでしょう！ならばこちらでも全力で貴方を構成させてみせます」

ちっ、やはりこの程度の発言じゃ気持ち曲げないか。

こうして、俺とOH構成委員会との戦いが幕をけるのであった。

3話[♂]え？新キャラ！？いきなりの新展開！？（前書き）

ぐだぐだです（汗

今回、新キャラと一宏の過去、そして一宏の容姿が明らかに！？

3話。え？新キャラ！？いきなりの新展開！？

それは、蓉子（もはやちゃんを付ける気も無くした）が来て数時間経った頃だった。

「今日は外へ行きましょう！」

「は？」

なにをいきなり言い出すんだこいつ？なんで外になんかでなきゃいけないんだよ…

「だ・か・ら！外に出かけましょうよ！」

いちいちうるさいやつだな。二度も言わなくても分かってるよ。

「やだよめんどくさい」

それを聞いた蓉子は、頬をぷくぷくと膨らませた。

「だめです！家にばかりいると、だめな人間になっちゃいます！」

「だりい〜」

いいよ、もともと駄目人間だし。

「だ・め・で・す！行ったら行くんです！早くしないと、私が大声でアナタにレイプされたって叫んじゃいますよ！？」

……はあ。仕方ない、行くしかないか。まあ、丁度エロゲーがなくなっただけに見てくるとしよう。

こうして、俺は数カ月振りの外出をするのであった。それよりも服はどうしようか。ここ数カ月スウェットしか着てなかったから、私服なんかどれを着たら良いかわからないな。

今の季節は秋、とりあえずワイシャツとジーパン着て、適当に羽織る物を持っていけばいいか。

服を整えるために久しぶりに鏡の前に立つ。生まれつき薄い眉毛、鋭い目付きに濁った瞳、女の子のショートヘアぐらいはあるであろうストレートで長い髪。髪はうっとうしいのでワックスでオールバックにした。うむ、前にもましていかちくなっただな。身長は前よりものびたのかな？前は174だから…今は何センチだろ？まあ、いっつか。

「お待たせ…」

「あ、用意できた…ね…」

玄関で待っていた蓉子に挨拶すると、蓉子はポカンと口を開けて固まった。

「？どうしたんだ？」

「い…いや…随分印象変わったなっさ」

ああ、そういうことね。まあ、それは仕方ないか。

「怖いかな？」

「ううん！そんなことないよ！」

いやいや、そんなムキになって否定しなくても（汗）まあ、怖いって思われて無いんだからいいか。

「んじゃあ、行くか」

「はい！」

まあこんなわけで、俺と蓉子の外出が始まったわけです。

久しぶりに見た風景はかなり新鮮だった。そういやあ、こうして人と並んで歩くのって何年振りだろう？俺がオタクになり始めたのは、彼女に振られた……というよりもフタマタされて捨てられてからだったな。あの時は純粋だったなあ。オタクとは一つも縁がなかったからなあ……はあ。

「んで、どこに行くんだ？」

シリアスモードから復活した俺は、とりあえず蓉子に今日の予定を聞くことにした。

「ううん、そうですね……。とりあえず、私が住めるだけの日用品を買おうと思ってます」

ふーん、住む……ねえ。え？住む？

「どこに……？」

「え？どこってそりゃあ…」

やめろ！止めてくれ！頼むからその続きを言わないでくれええ！
！

「一宏さんの家に」

あゝあ、言っちゃったよ…

「マジかよ…」

勘弁してくれよ…

「ちなみに、一宏さんのご両親には了解はとっておりますよ！電話で、『息子を救って下さるのなら是非！』って言っていました」

いつの間に二人とコミュニケーションを！？っていうか、是非じゃねえよ！？

「……もう何も言つまい」

ため息しかでてこないよ。

《時を同じくして》

一組のカップルが今日も高校の授業を終え、街を歩いていた。彼女の名前は篠崎真琴しのざきまこと、身長は165センチで小麦色の肌をしていて、瞳はくりくりなドングリ目。髪型は肩で切り揃えられ、毛先が軽く跳ねている。部活は陸上部に所属していて、通ってる高校、清風高校では学年で1・2を争う美少女である。そして、彼女にはある苦い思い出があった。

「ねえねえ！まこちゃん！」

彼氏の兼本隆之助かねもとりゅうすけが、反対側の歩道を指差して真琴の注意をひく。ちなみに、まこちゃんとは真琴のことである。

「ん？なに？」

真琴は心底興味なさそうに返事をした。

「ねえねえ！あれ見てよあれ！」

「あれ？」

そこには外出中の蓉子と一宏がいた。

「なんかあのカップルすげえよなあ。女は可愛いし男もカッコイイし、色んな人が見ているじゃん」

真琴はすこしムツとなった。確かにあのカップルの彼女は可愛い。しかし、それならば自分も負けない自信があったし、なによりも隆

之助が彼女のことを可愛いと言ったのが気に入らないのだ。

「……あっそ」

「……なあ、あの彼氏の方、見覚えない？」

しかし、そんな真琴の心情などわかるはずもなく質問をする隆之助。

「え？私は別に………っ！？」

瞳を見開き固まる真琴。

その男は自分の苦い思い出を作る原因となった男だった。

それは1年以上前に自分が二股をしたときの男、一宏だったからだ。そして、真琴の脳裏にはあの日の出来事が鮮明に写し出される。

あの時は最悪だった。

一宏と別れてからもうの一人の男は、毎日のように真琴に頻繁に暴力を奮っていた。真琴はあの時に一宏をフラなければ良かったと今の今まで後悔していた。今思えば、今までに一宏以上にカッコよくて優しい男はいなかったとさえ感じる。今付き合っている隆之助だって、どうせ自分の身体目当てだろう。

そして、今ここに一宏がいる。当然真琴は落ち着いてられない。

「……？どうしたの？」

心配そうに真琴の顔を覗き込む隆之助。

しかし、今の真琴には隆之助の言葉などまったく聞こえなかった。

「ごめん、もうキミとは付き合えないわ」

「え？おい！！」

そして真琴は隆之助と繋いでいた手を振りほどき、一宏の元へと向かい始めるのだった。

3話[♂]え？新キャラ！？いきなりの新展開！？（後書き）

評価よろしくね

4話[♂]大どんでん返し！？（前書き）

いきなりの急展開に、かなり波紋を呼ぶかもしれませんが！しかし、そんなことなど考えずに楽しくよんじやって下さい！

4話。大どんでん返し！？

しばらく蓉子と歩いていると、ビルやショッピングモールがたくさんならんでいる通りに出た。この通りは車はもちろん、人通りもおおいため、はぐれたりすると直ぐに迷子になってしまう。

まあそんなわけで、今は蓉子と手を繋ぎながらあるいているわけだが。

「ねえ、一宏さん」

不意に、なにやら元気な表情で蓉子が話しかけてきた。しかし、握ったてはブンブン振られていて元気いっぱいである。

「ん？どうした？」

「なんか私たち、さっきからいろんな人の注目のまとなってますね〜！」

「？そうか？まあ、別にきにすることもないだろう」

「一宏さんがカッコイイからですね！」

「んなわけあるかアホ」

大方、蓉子に見とれた男が鼻の下を伸ばしていたに違いない。よって、俺にはなんの関係もないわけだ。

クイツ、クイツ

ん？なんか今、誰かに袖を引っ張られたような……

「一宏さん、どうかしました？」

蓉子がキョトンとした顔で覗き込んできた。

「いや、なんでもない。早く行こうか」

「はい！」

再び歩き出す。

クイッククイック

ん！？またかよ！……はあ、一体誰が引っ張ってるんだ？

俺はゆっくりと後ろに振り返る。

「！？……なんでてめえがいやがるんだ！？」

そこにはとんでもない光景が広がっていた。

「フフン♪久しぶり、一宏くん♪」

それはかつて俺を裏切り、人間不信に陥らせた女、真琴だった。

「気安く一宏くんなんて呼ぶんじゃないよ。こっちはてめえに捨てられてから最悪な毎日辿ってたんだ、ムシズがはしる」

そう言いながら、俺は地面に唾を吐いた。蓉子はオロオロとした感じで俺の腕を握りしめた。

「あら、ずいぶん冷たいこと言うじゃない。一年ぶりに会ったんだから、もっと気の効いたこと言えないの？」

なに言ってるんだこのくそ女？俺を捨てたくせに調子の良いことばっか言いやがって。

「調子に乗んなよ？俺はもうあんたなんか好きじゃない。消えてくれ」

「イヤよ！ようやくアナタを見つけたんだもの、もう絶対に逃がさないわ」

……クソツ！ざけんじゃねえよ、ムナクソ悪い。

ふと、蓉子を見る。蓉子は俺と真琴の会話を、静かに聞いているみたいで、真琴のことを見つめていた。

「一宏さん」

不意に、蓉子が話しかけてくる。

「ああ？なんだ？」

「私は、少しこの女性とお話します。なので、一宏さんはそのシヨッピングモールに先に行ってください」

蓉子が話ながらシヨッピングモールを指をさす。そこは県内でも一番でかい場所で、店の名前はイ。ン。

「……わかったよ」

正直、真琴の出現について考えたいことがあったから、一人にさせてもらえるのはかなりありがたい。

俺は真琴の存在を無視するようにして、ショッピングモールへ入っていった。

《蓉子視点》

一宏さんを見送った私は、彼女の正面に立った。

「とりあえず、その喫茶店にでも入りませんか？」

私は、すぐとなりにあったアンティーク風の喫茶店を指さした。

「……うん、別にいいわよ」

良かった、ここで拒否されたら正直気まずくてしかたなかったよ
(汗)

店内は比較的落ち着いた感じのお店で、テーブルや椅子もとても可愛らしい感じ。機会があったら、一宏さんと来たいな。

「それで、話ってなに？」

ああ、そうだった、そうだった。

「えつとですね。とりあえず自己紹介でもしましょう。私は陽炎蓉子っていいいます」

「私は篠崎真琴、ヨロシクね。……いきなりなんだけど、アナタって一宏くんのカノジョ？」

っ！？ええっ！？

「違う違う！！そんなんじゃないってば！！……わたしは、ある組織から一宏さんの元に派遣されて来たんです」

びつくりした～！？いきなり彼女とか言い出すんだもん……

真琴さんはそんな私を吹き出しながら笑ったあと、『組織』という言葉を聞いて不思議そうな顔をした。

「組織？なあに、それ？」

「オタク＆引きこもり構成委員会です！」

それを聞いた真琴さんは絶句した。

「え？あいつオタクで引きこもりだったの？」

あれ？

「真琴さんは知らなかったんですか？」

「知らないよ！だって、私と付き合っていたときに彼の部屋に行っただけ、彼の部屋には机とテーブルとベッドしかなかったもん！一応本棚もあったけど、ほとんどが小説とか参考書だったし！」

ウソ！？そんなのありえないよ！？

「でも、今日私が部屋に入ったときは確かにオタクの世界が広がっていました！本棚はマンガ本がビッシリと並べてありましたし、パソコンもありました！おまけにエッチなゲームとかも沢山散乱していて、真琴さんの知っている一宏さんとは思えません！」

お互いに目を丸くして見合わせる。…あれ、そういえば一宏さんがなにか大切なことを言っていたような……

「……私のせいだ」

「え！？」

表情の暗くなる真琴さん。

「……彼、私にさっき言ってたよね。『あんたのせいだ』って。きつと、私が二股をかけて彼をフツたからよ」

……なるほど、だからかれはあんなに辛そうな顔をしていたんですか。これedyやく大切なことを思い出せました。

「……なぜあなたは、彼を裏切るような真似を？」

「……実は……」

ここからの話は、こんな感じだった。

真琴さんは一宏さんとお互いに好き合っていたのだが、恋人として前進出来ないでいたことに寂しさを感じていた。

そして、そんなときにたまたま現れた昔の元カレに優しい言葉をかけられて、もう一度やり直したいと思ってしまった。そして、そんな会話をしていた二人にたまたま居合わせてしまった一宏が、自分が捨てられたのだと確信した。そして、最終的にその元カレにも暴力を奮われ、あのとときに一宏をフツてしまったのを後悔してきたのだという。

「……そうだったんですか」

それは、お互いがお互いを思いすぎてしまっがゆえの過ちだったのかもしれない。大切に思いすぎたがゆえになかなか恋人として先に進めなかった一宏さん、一宏さんが大好きだったがゆえに心に空いた穴を埋めようとした真琴さん。

「わたし……いったいどうしたらいいんだろう……うつ……うつ……」

とうとう泣き始めてしまった真琴さん。

「……大丈夫ですよ、真琴さん」

「え？」

「大丈夫です、私が助けてあげますよ！真琴さんのことも、一宏さんのことも……だから、もう泣かないでください」

私はそう言うと、ハンカチを真琴さんに渡した。しかし、再び涙

を溢れさせてしまった。

「うっ… ひっく… ありがとう… ありがとう」

私、少し無理しちゃいました。本当は私も一宏さんのことが大好きなんです。畏にハマって怪我をしていた私を、汚がりもせずにかけてくれた一宏さん。彼は… うっん、真琴さんが知っている彼は、私が知らないほど優しい人なのかもしれない。

4話♂大どんでん返し！？（後書き）

評価よろしくね

評価くれた人、アイシテルカラ

5話♂親友（前書き）

自分的に、この手のキャラは大好きだ…

5話。親友

店内に入った俺は、そそくさとゲームコーナーへ向かう。
無論、言うまでもない。

新たなゲームを調達するためだ。

本当は真琴のことが気になるのを、現実逃避して一時的に忘れたいからなんだけどね。正直、つい昨日までは彼女のことを憎んでいたのに、彼女に会って話せたことで胸にあつた重荷が少し軽くなった気がする。もしかしたら、なんだかんだ言つて本当は真琴に会いたかったのかもしれないな。あゝあ、お互いに未練タラアだよ（汗）

まあ、それはそれだ。ここは蓉子に任せて、俺はまったりとゲームでも選ぶとするか。

「おや、一宏殿ではないか」

ん？なんか今、背後で俺を呼ぶ声が聞こえたような…

俺は、ゆっくりゆっくりと後ろに振り返る。

「お！瑛じゃん！久しぶり〜！」

紹介しよう！俺の後ろに立っていた人物とは、小学生の頃からの親友の鬼嶋瑛だ！だがしかし、侮ることなかれ！突然だが、コイツは男ではない！大きな瞳にパッチリの二重、黒髪のサラサラショートヘアに、身長は165センチ程。学ランを着ていて俺の同級生なんだが、コイツが男の姿をしているには訳がある。

それは、コイツの家柄にある。

コイツの家は代々道場をしているのだが、生まれてきた三人の子供がすべて女だったのだ。しかし、鬼嶋家では代々男が継ぐことになっている。そのため、一番最後に生まれてきた瑛は、これまでずっと男として育てられてきた。ちなみに、この事実を知っているのは俺だけである。また、なぜ知っているのかは、以下の会話で連想してくれ。

それは、小学生の時に俺んちにお泊まりに来たときだった。

《お風呂場にて》

『なあ、一宏。少し聞きたいことがあるのだが…』

『どうした？』

『なぜ……わたしの股にはお前と同じソレがついておらんのだ？』

『え？ちゃんとついているじゃな………つぶ！？』

と、まあこんな感じだ。それ以来、コイツは自分を女と理解したも

の、『我が一族の誇りにかけて、わたしは漢を通してみせる！』
といって漢を貫いている。ある意味、コイツは真の漢と言えるだろ
う。

おっと、話が長くなりすぎたな。とりあえず、コイツの紹介はこ
れで終わりにしよう。

「ところで、一宏は一体なにをやっておるのだ？しばらく学校に來
ていなかったが…」

ああ、コイツは俺が不登校になった理由は知らなかったんだった
な。

「オタクがバレて気まずくなったから、現在不登校中」

「嘘。実は知ってる」

うざー！こいつマジでうざいな！？

「うつせえな。そういうお前こそ、こんな場所でなにやってるんだ
？」

コイツはとてもじゃないが、ゲームをやるタイプじゃないはずだ
が…

「いや、姉の静音に頼まれたげえむを取りに來たのだ」

ちなみに静音は長女ね。二女は香緒里。

「あゝね。何気にあの人ゲーマーだからなあ」

俺、あの人に対戦ゲームで勝ったこと一度もねえもん。確か、ゲーセンの連勝記録で100を突破したんだっけな？オマケにゲームだけじゃなくて合気道の達人だし（汗）

「静音姉さんももう少し女らしくなれば、結婚の相手だつてすぐに見つかるのだから…」

ため息を吐き、頭を抱えながら瑛が言った。

「まったくだ」

その意見には俺も同感だな。あの人は顔が良くてボン！キュツ！パツ！なんだから、その気になればすぐに彼氏の一人や二人作れるはずなんだが…はあ。

「……お前、もう学校には戻らんのか？」

「…まあな。正直、学校に戻っても色んなやつらに白い目で見られるだけだろ？そんなつまんねえ学校なんか、勘弁なんだよ」

別にオタクとか関係ねえじゃねえか。じゃあなにか？男がエッチなマンガ読んだらオタクなのか？マンガを読んだらオタクなのか？アニメを見たらオタクなのか？ゲームをしたらオタクなのか？別にそんななんの勝手じゃねえか。他人が干渉してイメージを肯定するんじゃねえよ。

「……わたしはつまらない」

「ん？どうかしたか？」

「わたしはお前がない学校などつまらない。生きた心地がしない。わたしはまた、お前とふざけ合いながら学校に行きたい。だから頼む、学校に来てくれ……！」

さて、どうしたものか。ぶっちゃけいま学校に行くのは厳しいんだよねあゝ（汗）

「……まあ、気が向いたらな」

「そうか……わかった。」

「……悪いな」

まださすがに行く気にはなれないが、コイツの為にも考えてみるか。

「……わたしは、お前を信じているからな」

「……ああ」

こうして、俺は親友と久しぶりに再会したのだった。

その後、俺と瑛はショッピングモールの中を色々と歩きながらお互いの出来事を話した。久しぶりに会った親友は、やっぱり俺の中に強く存在していて、とても安心できた。

5話[♂]親友（後書き）

評価シテクレタヒト、アナタノコト、アイシテルカラ！

評価よろしくね〜

6話♂和解（前書き）

ここまではシリアス！次回からは楽しくコメディーでいくぞー！あと、評価してくれた人、アイシテルカラ！コンバンワ！チャ。・ドンゴンデス！（最早意味不明）

6話。和解

しばらく瑛と歩いていると、蓉子が戻って来た。その隣には、腕を引かれながら真琴もいる。

「なあ一宏。あの少女は一体誰なのだ？」

ああ、瑛はまだ蓉子のこと知らないんだっけか。

「…俺をオタクの暖かい世界から連れ戻しにきた、厄介なやつだ。オマケに引きこもりも止めさせるつもりらしい…」

「…ほう、それはそれは…」

なにやら嬉しそうな笑みを浮かべ、アゴを親指と人差し指で挟む瑛。…こいつ、絶対になにか企んでいるな。

「…お前、一体なにを考えているんだ？」

「…いや、わたしも一宏の引きこもりを止めさせるつもりでいたかな。協力してお前を学校に行かせようと思って…」

ここに思わぬ強敵出現！？こいつケン力強いんだよね。確か、柔道の達人だった気が……

「違う、空手だ」

「ああ、そうだったか……つてええ！？なんで今俺の考えていることがわかったの！？」

「何を言うか。このようなこと、親友ならば当然のことである」

親友ってすげえええ！？俺にはぜってえに無理だよ！？

そんなことを話していると、蓉子と真琴が目の前に立っていた。

「グッジョブ！」

「グッジョブ！」

親指を立てて向き合う蓉子と瑛。この二人にはなにか通じ合うものがあつたみたいだ。

「わたしの名は鬼嶋瑛だ。よろしく」

「私は陽炎蓉子です！よろしくお願いします！」

この二人は、きっとかなり仲良くなれると思う。そして、かなり強力なタッグが生まれると思う。

「やつほ、瑛！数時間ぶりだね」

「うむ、こんにちは真琴。願いが叶ってよかったな」

「べっ別に叶ってなんかいないよ！」

「何を言うか。こうしてまた、一宏と会うことが出来たでわないか」

「うっ…うぬぬっ」

なんか、こんなにいろんなやつに会えたのは久しぶりだなあ。
ちなみに、真琴は瑛が女だということは知らない。

「コソコソ…実は、前々から真琴は、お前のことで私に相談していたのだよ…コソコソ」

耳元でそんなことを言う瑛。何気にそれはちょっと嬉しいことである。

「あんた、なに喋ってんの!？」

野獣の瞳でにらみつける真琴は、かなりやばい雰囲気を出している。こりやまずいな。

「いつ、いや、なんでもない!なんでもないぞ!？」

「……そう。なら、別に良いんだけど」

流石の瑛も、本気の真琴にはかなわないのか。

「ところで蓉子。真琴とは話がついたのか？」

「はい!速やかに正確に終了しましたよ、そ・れ・よ・り!真琴さん!一宏さんと、ちゃんとお話してください!あと、一宏さんも落ち着いてしっかりと聞いてあげてください!」

「「……わかったよ」「」

俺は真琴をまっすぐに見つめる。

「…ごめんなさい！」

先に話を始めたのは真琴だった。

「え？」

「実は…」

《前話参照》

「そうか、それじゃあ俺がフラれても仕方がないな」

「本当にごめんなさい…」

涙を流しながら真琴が言う。なんか、すっげえ罪悪感だなあ（汗）

「もう泣くなよ」

「え？…なんでもっと怒らないの？」

んなこと言われてもな…確かに真琴も悪いけど、さっきとは違ってお互いに落ち着いているから割りと冷静になって考えられるし。

「別にお前だけが悪いんじゃないし、俺も悪かったんだからもう怒る理由なんてないじゃねえか」

「うつ…ひつく…ありがとう…ありがとう…」

俺はよしよしといった感じで真琴の頭を撫でた。ずいぶん懐かしい感触だな。今までこいつに対して込めていた憎しみが、なんだかアホらしく感じられてきたよ。

俺は蓉子と瑛の二人を見た。二人とも、凄く嬉しそうな顔をしていた。

「これでオタクをやめられるな!」

「これでオタクをやめられますね!」

ハモる瑛と蓉子。

ああ…これでオタクを…って、

「それとこれとは話がべつじゃあ…!!!!」

「なにいゝ!?!」

「ええゝ!?!」

二度目のハモりをみせる二人。これで確実づけることができた。コイツらは絶対に気が合うな。

「ねえ一宏。一つお願いがあるの」

泣き止んだ真琴が、俺の瞳を見つめながら言う。

「なんだ?」

途端にモジモジしはじめる真琴。かつ…可愛いな。

「えっとね…オタクをやめて言わないから…一緒に学校に学校行くっ？」

……………はっ!?

「なんでそうなんだよ!? 普通そういう場面って『キスして』とか『また付き合つて』とか言つもんだろお!?’

期待した俺がバカみたいじゃねえか!?’…………ちなみに、俺と瑛と真琴はみんな清風高校である。

「それはまあ、また私が時間をかけてメロメロにします! それよりも私は一宏と学校に行きたいの! もし断ったら、明日学校であんたにレイプされたって叫びながら放送室に駆け込んでやる!!’

計つたなシ。ア!?’

「……………はあ。わかつたよ。そこまで言うなら学校に行つてやるよ」

「やったあ!’

「その代わり、俺が虐めにあつたら助けてくれよな」

「わかつてるって」

こうして、もうすでに俺の明日のスケジュールが決定しているのであつた。

「ねえ瑛さん」

「なんだ蓉子」

「私も一緒に学校に行って良いですか？」

「もちろんだとも！なあに、教職員など私が黙らせておくから、心配せずに通学するがよい！」

「ありがとうございます、瑛さん！」

こうして、また問題が増えるのであった。

6話♂和解（後書き）

評価よろしくね！

7話。通学テラウザス（前書き）

さあ！今回からコメディーだ！次回もコメディーだ！今日は1日であと4話か5話更新出来たらいいな（汗）楽しみに待っててねえ（ドラ○もん口調）

あと、評価ありがとう♪引き続き評価よろしくね♪あとがきも見てね♪

7話。通学テラウザス

『ピヨッ…ピヨピヨ…』

あゝ、今日もいつもどりの朝がやってきたぞ。まあ、二度寝するけどな…

「一宏さん！起きてください！」

……なんだ？誰か俺を呼んでいるのか？誰だ一体俺の安眠を奪おうとする輩は。

「ダメよ蓉子。一宏はそんな起こしかたじゃ」

「え？じゃあ、どうするの？真琴さん」

「まあまあ、ここは瑛に任せなさいな。瑛、ちょっと一発かましてあげなさい」

「うむ、任せておけ！」

ズガン！

「ぐふうを！？」

は…腹が…決…れた！？

「瑛！てめえ一体なにしゃがる！？朝飯もまだ食ってねえのに腹ん中の物リバーズしそうになっちまったじゃねえか！？」

「うむ！朝から元気なのは良いことだ！では、早く着替えて学校に行こうではないか！」

え？シカト？今の話は全てスルーですか！？

「今日は学校に行くの！だから早く着替えてよね」

ああ、そうだったね真琴さん。行かなければ無条件でレイプ魔確定ですからね。

うちの高校は男子は学ラン、女子はセーラー服で今時珍しい（？）感じの学校である。

「……着替えるんで出ていってくださいか？」

「くくくはっはっはっは」

え？出ていってくれないの？やめて！やめてよ！お願いだからそんなに三人して手をワキワキしないで！

「い……いぎゃあああああ！！！！？？？？」

……はあ。

結局女三人に脱がされた俺。真琴とか『乳首ピンクなんだ』とか言

って感心してたし、瑛は瑛で俺の腹筋を見て『うむ！ちゃんと鍛えているようだな！』とか言ってたし、しまいにや蓉子なんか俺の股間（パンツは履いている）を見て『ねえ！おつきしないの！？おつきしないの！？』なんて言ってたからな。

「……はあ……」

今は通学路を歩いている。俺んちから学校までは歩いて10分くらいのところにあるので、自転車で行く必要は無いのだ。

「あんた、さつきからため息すぎ！せつかく久しぶりの登校なんだから、もっと元気にいきなさい！」

良いかい真琴。お前が俺を疲れさせているんだよ！？なに他人事みたいなこと言っているんだ！？

しかし、そんなことを言えるわけがない弱気な俺。

「……わかったよ……」

まったく、昨日の今日でもうこれかよ。勘弁してくれよ。

「フンフンフンッ」

あれ？珍しく瑛が鼻歌なんか歌ってるよ。

「どうしたんだ瑛。随分嬉しそうじゃねえか」

途端、嬉しそうに笑顔を浮かべる瑛。

「いや、お前と一緒に学校に行けるのが嬉しくてな。つついっはしやいでしまったのだ」

ああ、そういうことね。でもお前、他人から男だと判断されているんだから、そういう発言は完全にホモと間違えられるから！

「「じとー……」」

ほら、真琴と蓉子が見ているじゃん！？ああ、やめてえ！そんな目で俺を見ないで！！

「私、学校なんか初めてです」

ああ、蓉子は妖怪だから学校行くの初めてなんだっけか。

「楽しみか？」

「はい。すごく楽しみです」

そうか。俺は久しぶりの学校に憂鬱な気分で一杯だ。

「……………はあ」

そんなこんなをしているうちに、既に学校に着いてしまった。ああ、今日は一日ブルーになりそうだ。

校舎内に入ると、いろんな生徒からの視線を感じた。それは、怯えの目だったり軽蔑の目だったり様々であるが、俺にとって好ま

しくない視線であることには変わりはない。

「一宏…大丈夫か？」

瑛が心配そうな顔で言う。正直気まずくて堪らないが、少しでも心配はかけさせたくないな。

「問題ない。お前たちがいるから大丈夫だ」

「そうか…」

階段を登ると2学年の教室に着いた。この学年は2階で、右から1組、左から7組といった順番になっていて、階段を登り終えるとすぐ目の前に4組がある。

教室の前まで来ると、真琴アンドウ蓉子と別れた。俺は瑛と同じクラスで2組、真琴は蓉子と同じクラスで1組である。基本的にギヤルゲーや小説ってのは転校生は必ず主人公と同じクラスになるのだが、これはリアルだからそう上手くはいかない。まあ、妖怪がいる時点でもはやリアルとは言い難いけどね。

とりあえず、瑛と教室に入る。うむ、思った通りだ！みんな驚きと嫌悪の眼差しで見ているな！

「みんな、おはよう！」

先に教室に入った瑛が皆に挨拶をする。

その瞬間、全ての生徒が俺から視線を外し、瑛に挨拶を返す。

「瑛くん！おはよう！」

その中で、一人の女子が瑛に駆け寄ってきた。髪は赤く、前髪は斜め分け、後ろにのびた髪は右斜め後ろに後頭部から縛ってある。……なんか、縛るって言葉エロいな……

「おお、亜希ではないか。おはよう！」

瑛も挨拶を返す。この女の子は亜希という名前なのか。

「……ねえ瑛くん、ちょっとこっちに来て」

「ん？どうかしたのか？」

亜希さんは瑛を連れて教室の隅に行ってしまった。あゝあ、置いてばかりかよ。回りの視線もかなり痛いし。仕方がない、席について寝るか。

俺は席換えをしたかもしれないので、とりあえず教卓にある席順のプリントをみる。どうやら俺は、一番窓側の一番後ろの席みたいだ。これ絶対に仕組まれてるよ。

俺は席につくと、バックを置いて寝ることにした。

いきなりわたしを呼び出した亜希。本名は山本亜希。入学当初からのわたしの友達だ。男子だけでなく女子からも人気があり、学年ランキングでは真琴とタメをはるほどの美少女である。

「亜希、一体どうしたのだ？」

なんだか亜希は膨れ面で、あからさまに不機嫌さをアピールしている。

「……なんであの人がいるの？」

あの人？ああ、一宏のことか。

「なぜそんなことを言うのだ？別に構わんではないか」

「だってあの人……オタクじゃん。それに怖いし。出来ることなら、来て欲しくてなかったな」

なるほど、要するにわたしが一宏を連れて来たのが気に入らないわけか。

「確かにあやつはオタクで、見た目も近づきづらい。しかし、本当のあやつを知らずにわたしの親友をけなさないでくれないか？」

しかし、不機嫌そうな表情を崩さない亜希。

「でもさあ……」

まったく、困ったやつだ。これはもしかしたら一宏が嫌がるかもしれないが、話すしかあるまい。

「あやつがオタクになったのには、実は訳があるのだ…」

「訳？」

「あやつが彼女に振られたとき、1ヶ月くらい脱け殻のような状態があつてな。

そんな姿を見かねたわたしが、姉の静音に相談したのだ。そしたら姉が、『お姉ちゃんにまかせとけ』』と行って一宏んちに行つたのだ。そして帰つて来たときに何をしたのか聞いたら、『嫌なことはゲームで忘れちゃえ』そして、彼女への憎しみを忘れずにね』』と言つて、みっちり一宏の身体に染み込ませてきたらしい…」

だから実質一宏が真琴に異常な憎しみを持つていたのは静音のせいなのだ。完全にこれは洗脳だつたと今更ながら思う。ちなみに、一宏はそのときのことは完全に憶えていない。

「そうだつたんだ……苦労したんだね」

哀れんだ目で一宏を見る亜希。

「ああ。だからあやつを優しく扱つてあげてくれぬか？」

「…うん、わかつたよ」

「ありがとう。お前が優しくして良かったよ」

わたしは亜希の頭を優しく撫でる。亜希はゴロゴロと猫のような顔をしながら喜んでした。

「エヘヘヘ」

うむ、良かった良かった！

こうして、一宏の知らないところで様々な事実が語られるのであった。

そして、実は亜希が瑛のことに好意を寄せていたことに、まったく気づかない鈍感な瑛であった。

7話[♂]通学テラウザス（後書き）

さあ、次回予告だ！次回はコメディーがかなり濃いぞ！久しぶりにオタク全開だ！よろしくね！

8話♂先生巨乳美人ってまじ憧れね？（前書き）

あゝ結局更新間に合いませんでした（汗）あと2話くらいはいけるかな？12時前に9話を更新します！では、どうぞ！

8話。先生巨乳美人ってまじ懂れね？

あゝうぜえ。学校ってマジでうぜえのな。君たちも一度瞳をとじて君を描く。かずにそつと耳を澄ましてごらん。一発でわかる、自分のクラスがどれ程うるさいのかが。

「よう冴木！」

誰かに呼ばれて顔をあげる。……誰だ？こいつら。とりあえず三人組のうちの一番リーダーっぽいやつに話しかける。

「……ああ、きみ田中くんか？どう？あの金魚まだ生きているの？ああそう。元気にしてるんだ。悪いけど今は君と金魚の話なんかするつもりはないから、またね」

俺は適当にそんなことを言うと、また机の上に頭をのせて瞳を閉じる。君は描かない。っていうか、なぜか頭の中でさっきから平。堅の『瞳を閉じて』が流れているのだがなぜだ。

しかし、そんな安息を、神は俺に与えてはくれなかった。

ズガン！

机が蹴飛ばされたのだ。

なんだようぜえな。俺なんかシカトして省いて相手にしなきゃ良いじゃねえかよ。

「……なんだよ田中！いくら金魚の話がしたかったからって、そんなにキレなくてもいいじゃないか！？」

「俺は田中じゃねえ！！金魚だつて飼つてねえし！！んなことよりてめえ！！人の彼女奪つておいてどのツラさげてここにきたんだ！？ああ！？」

うつせえなあゝ、なに勝手に因縁つけてやがるんだよ！？

「んなもんしらねえよ！！」

「知らねえわけねえだろうか！？昨日真琴がお前を見たたん、『別れる』とかいいだしたんだぜ！？どつりで見覚えあつたと思つたぜ！同じクラスなんだもんなあ！？オマケにオタクなんて……あいつもなんでお前みたいなやつに惚れたんだろうなあ！？」

なんだその言い方！？ああゝ腹立つ！！マジで頭に來た！！つていつか、真琴のやつよくこんなやつと付き合つてたな！？

「てめえ、いい加減にしろよ！？真琴がてめえを捨てたのは、真琴の意思だ！！俺のせえじゃねえ！！第一、てめえはオタクのことをなんにも分かつてねえ！！」

まあ、ぶつちやけ捨られたのは俺もだけだな。

「なんだと！？」

「いいか！？オタクとはひとくくりで表してはならない！！そんな全国のオタクの方々に失礼だ！！いいか！？まずはゲームオタク

だ！！お前はゲームをやるやつをオタクだと思うか！？」

「え！？いや……思わない……かな？」

「だろう！？じゃあ、そのゲームのキャラのフィギュア、アニメ化されたDVD、続編をこよなく愛すやつはどう思う！？ゲームのイベント、全シリーズのキャラを全て言い当てられるやつをどうおもうううう！？」

「オタク……か？」

「そう！！その通りだ！！現代人はこの境目がまったく分かっておらん！！いいか！？オタクとは自分がハマっているものをもつ非常に純粋なやつなんだよ！！しかし、最近の現代人は自分がハマれるものを持つやつが少なすぎる！！そのような輩がオタクをバカにするなど言語同断！！全国のオタクに謝りたまえ！！」

「え？……あ、はあ？すみません」

「うむ、それで良いのだ」

3人組はなんだかきこちなく俺の席を去っていった。

《それを見た瑛と亜希》

「これは重病だね……」

亜希がため息をつきながら言う。

「ああ、そうだな」

瑛もため息をつくのであった。

《視点は一宏へ》

しばらく寝ていると、朝のホームルームになった。教卓には、担任の巨乳先生である渡辺先生がいる。髪型は少し癖のついた髪を腰まで伸ばし、少したれ目である。

「あのおー、今日はあー、冴木くんがあー、来ているのねえー」

この通り、見た目も話し方もかなりおっとりしているのだ。

渡辺先生のこの発言で、かなり教室がシラケた。

「それではあー、これでえー、ホームルームをおー、終わりにしますー」

そう言っただけで渡辺先生は教室を出ていった。

… 午前の授業は全て寝てしまったため、もうお昼の時間である。…
… 飯持ってきてないんだよなあ（汗）いいや、昼休みも寝るか。

「おい、一宏！」

んあ？誰だ俺を呼んだやつは？

「……なんだ瑛か……。どうかしたのか？」

気がつけば机の隣には瑛がたっていた。

「一緒に昼食でも食べないか？」

「ああ……俺弁当ねえんだわ（汗）」

「それならば安心しろ。そのうち真琴と蓉子がここに来る」

いや、俺の弁当とその2人との繋がりがわからん。

「なんだそんな顔して。安心しろ、ちゃんと蓉子がお前の分の弁当も作ってくれたらしいぞ」

ああ、そうなんだ……。え？アイツが弁当！？あいつまじで弁当なんか作れんのかよ！？

「……はあ」

ため息が出まっただぜ……。

「お！2人が来たみたいだぞ！」

「一宏さんお待ちせえ〜！」

「一宏！待ったかい？」

ああ… 2人して俺の名前を呼んで駆け込んで来やがって… おかげでみんな注目しているよ…（涙）

「……はあ（↑本日数回目のため息）」

「じゃあ、みんなで食べよう」

そう言って机をくつつけ始める亜希。

「うむ、そうだな」

その机に一番最初につく瑛。俺は瑛の隣に座りながら、瑛に耳打ちする。

「ボソボソ……なあ、亜希って人は俺がいて大丈夫なのか？……ボソボソ」

「ボソボソ……安心しろ。お前は嫌だったかもしれないが、お前のことは亜希に話してある……ボソボソ」

お前、もしかして…

「ボソボソ……真琴のこと話したのか？……ボソボソ」

「ボソボソ……安心しろ。名前までは言っではおらん……ボソボソ」

「ボソボソ……良かったあ……ボソボソ」

「ほらー宏♪お弁当だよ」

蓉子が俺の前の席に座りながら俺の机に弁当箱を置いた。

「……中身は大丈夫なのか？」

瞬間、膨れ顔になる蓉子。

「大丈夫です！文句は食べてから言ってください！」

「……わかったよ」

ああーやだやだ。中身に変なキノコが入ってたらやだなあー。

そんなことを考えながら中身を開ける。どうやら今日はしょうが焼き弁当のようだ。

「ぱくっ」

一口口に入れる。

「どうどう！？おいしい！？」

「……美味い」

これはなかなかイケるな。まず味付けだが、しょっぱくもなくご飯のオカズに丁度くて美味い！

「本当！？やったあ」

嬉しそうに笑う蓉子。仕方ない、ご褒美に頭でも撫でてやるか。

「なでなで」

「エへへへ」

おい？尻尾が出てるぞ？ちゃんと隠しなさいよ。

「明日は私がお弁当作るから、楽しみに待っててね」

明日は真琴が作ってくれるのか。楽しみと不安が半々だよ。

「ありがとうな」

「うふふ」

今度は真琴の頭を撫でる。凄く喜んでいた。

その後は何事もなく昼休みは過ぎていった……沢山の男子生徒の汗くさい視線に刺されながら。そしてこの後俺にとって非常にありがたくないことが起こるとは、この時の俺はまだ知らないのだった…。

9話♂ワロスの意味が知りたくて…（前書き）

ワロスってなんて意味？

9話。ワロスの意味が知りたくて…

さあ、待ちに待った放課後だ。昼食後は周りの視線が痛かったから5・6時間目の授業は見事なまでの睡眠で乗り越えてみせた。思わず自分をほめてしまいたくなる。

「一宏、帰るぞ」

「冴木くん、帰ろっ」

俺の机の横には既に瑛と亜希が待っていた。

「ああ、そうするか。それと亜希。俺は名字を知らないから亜希って呼ぶから、お前も一宏って呼んでくれ」

「うん、わかったよ一宏くんっ」

「おう」

バックに一通り荷物を詰め終わった俺は、椅子から立ち上がり席を後にする。いや、しようと思った。しようと思ったんだが見知らぬ男に右肩を捕まれたのだ。

「……待てよ冴木」

またお前か田中くん。いい加減にしてくれよ…

「さっきから何回も言ってるだろ田中！俺はお前と金魚の話をするつもりはねえんだよ！」

「だから田中じゃねえつつてんだろてめえ！！さっきも真琴の話で用があるって言ったばっかだろうが！！」

「なにい！？お前田中じゃなかったのか！？」

「いまさら！？俺は田中じゃなくて兼本だ！！」

「惜しい……」

「惜しくねえ！！かすつてもいねえよ！！」

「あゝあゝ逆ギレですかそうですか…ボソボソ…だりい…ボソボソ」

「逆ギレでもねえし！？つてか今、ちつちええ声でなんか言っただろ！？」

「ボソボソ言いました」

「あゝもうつつさい！！……とりあえず、俺たちとちよつと校舎裏まで付き合えや」

えゝ。まったくだりいゝなあ。これから帰って昨日買ったゲームやるうと思つたのによあ。

瑛と亜希を見る。二人とも真剣な顔で俺を見ていた。お前ら…ボケも真剣に見ていたのか？

「まあな」

ああ、瑛は親友だから心が読めるのか。

「わりい、ちよつと校門辺りで待っててくれるか？」

「……わかった。気をつけろよ」

「おうよ」

まあ、こいつら3人くらいならケンカしても秒殺できるから余裕だけだな。

「なあ兼本」

「なんだ？」

「……校舎裏のはずなのに西部劇のような舞台のセットなのはなぜだ？」

「それは……ただの演出じゃね？」

「……そうか」

いつの間にか一対一になっている俺と兼本。他の二人は帰ってし

まいったようだ。

「なんでほかの奴等を帰しちまったんだ？」

「…彼女とデートだとさ」

こいつ、実はかなり可哀想いやつなんじゃないのか？それともただのバカか？

「さあ、どこからでもかかってこいよ」

そう言っただけでファイティングポーズをとる兼本。

「……いいのか？手加減は出来んぞ？」

俺は中国憲法の構えをとる。

実は俺は、鬼嶋道場で10年間中国憲法を習っていたため、普通の高校生にはまず負けはしない。……まあ、ここは悪魔でも『普通の高校生には』だけだな。鬼嶋姉妹ははもつと強いぞ！なんてつつて3歳の頃から稽古してるからな！俺は5歳の頃から始めてここ2年くらい行っただけから今頃と手合わせしたらボロ負けだな。

「それじゃあ……行くぜ！」

そして戦いのゴングが鳴り響いた。

バシ、ドゴ、ゴガ、ズキュン、ダガン！

結果はあっさりついた。恐らくK-1の判定でも全て3対0で

判定勝ちだろう。戦いとは酷いものだ…。

「ま…待てよ…」

俺の足首をつかむ兼本。

「なんだ？」

「お前に…最後の…頼みがある」

いや、別にお前は死んだりしないから最後にはならないと思うが？…まあいい、聞いてやろう。

「なんだ？」

「鬼嶋に…瑛に伝えておいてくれねえか？お前を愛していると…」

「ああ、分かった！瑛にだな…え！？瑛！？真琴じゃねえの！？」

なんだよそれ！？俺はてつきり真琴に伝えるのかと思ってたぞ！
？いや、まあ別に性別に置いてもクリアしているから伝えても大丈夫だとは思うが、あまりにも予想GUYな展開だな！？

「なあに、惚れたのは今日の昼休みだ。あんなに元気な瑛は、俺は初めてみたよ」

「…いや、アイツ男だけどお前は本当に良いのか！？」

女と知っていても一応聞く俺。

「なあに…惚れた弱味ってやつさ。安心しろ。愛は時間や性別じゃねえ。大切なのは心だ!」

そう言っ て兼本は立ち上げると、誇らしげに校舎裏を去っていった。

「……帰ろ」

俺もホコリを叩いてさっさと瑛達んところに行かないとな。無駄に待たせちまっただろうし。

「お! ようやく来たか」

一番最初に俺に気付いた瑛が手を振る。俺も手を振り替えて皆の元へと走っていく。

「悪い悪い。待たせちまったな」

「遅いですよー宏さん!?!」

「そつだそつだあゝ!?!」

膨れ面になる蓉子と真琴。

「ごめんな(汗) なんだか兼本とかいうやつに絡まれちゃってさあゝ」

そう言いながら二人の頭をよしよしと撫でる。 なんだか本当に嬉

しそつだな。

「兼本つて隆之助のこと？」

真琴が目を閉じて和みながら聞いてきた。蓉子はずっと尻尾をフリフリしている。

「まあな」

「……あいつなんか言つてた？」

うーん、どうなんだろう？まあ、ここは瑛の話は伏せて置いてやるか。

「いや……特に何も無かつたな。一発KOにしてやつたし」

「さすが♪よし！誉めてつかわす！」

今度は真琴になでなでされてしまった。

「あ！真琴さんだけです！私にもやらせてください！」

ついでになでなでしてくる蓉子。なんか……照れるな。

今日はなんだかんだ言つて楽しかつたな。これなら毎日学校にいても余裕だぜ♪

10話♂ヤングジャ。プについて（前書き）

さあさあ！今回も楽しく読んじやってください！感想、評価ありがとう
づづづづづ

10話。ヤングジャ。プについて

それは唐突なことだった。

「ねえ一宏さん」

今は土曜日の夕方。俺の部屋にいた蓉子が、ふと、雑誌を読みなから話しかけてきた。

「なんだ？」

「なんでヤングジャ。プって……時々少年誌よりもエッチなシーンがあるのにヤングなんですか？」

「……いや、なぜかって聞かれても（汗）」

「うーん、俺にもわからないなあ？ちよつと有機野菜さんにでも聞いてみるわ」

「ほんとですか？ありがとうございますっ」

さて、有機野菜さんとは久しぶりの会話だぞ。ちゃんと返事くれるかな？

カタカタカタカタ…

『ヤングジャ。プなどの雑誌は、なぜヤングがつくのでしょうか？わかりますか？（汗）』

暫く更新ボタンを押していると、返事が書き込みしてあった。この掲示板では他の人からの返事もあるのだが、今は丁度良く有機野菜さんからだったようだ。

『うーん、私にもよくわかりません（汗）確かにエッチなシーンがあるのであればアダルトジャ。プにするべきだと思います。ヤングだと少年よりも幼い印象をもってしまいますからね（笑）』

『そうですか…』

『お力になれなくて申し訳ありません（汗）私も他の掲示板に力をつけてみますので、あらたに情報がありしだい連絡しますね（笑）』

『申し訳ないです、わざわざろくでもないことに巻き込んでしまつて（涙）』

『いえいえ（笑）こちらとしてもひまつぶしになる良い機会ですよ』

『そうですか（汗）それじゃあよろしくお願いします』

さあゝて、他に誰か聞けるやついたっけなあゝ。

……とりあえず、瑛にでも聞いてみるか。

俺は携帯を手に取り、携帯を開く。待ち受け画面はすもも。もももだ。ぶっちゃけ。付けても意味なくね？

俺はアドレス帳から瑛の電話番号を見つけて電話をする。実は瑛、ああ見えて携帯をもっているのだ。なんでも、静音さんが買ったときにプレゼントで買って貰ったんだとか。

トゥルルルル……

『もしもし』

「あ、もしもし。俺だよ俺」

『……おれおれ詐欺か？』

「違う」

『じゃあ……振り込めの方か？』

「それも違う！」

『知ってる』

こいつなんかムカつくな。つうか今さらおれおれ詐欺とかやってるやつそんなにいないし！犯罪だから！

「……ちよつと聞きたいことがある」

ようやく話の内容に触れることができる。

『なんだ？』

「あんな、ヤングジャ。プとかってなぜヤングがつくんだ？」

『ふむふむ……』

うーん、わかるかなあ（汗）

『まず一つ聞きたいことがある』

「なんだ？」

『やんぐじゃ。ぷとはなんだ？子供が飛ぶのか？』

そこを考えてなかったああああ！！？？そうだよこいつマンガ読まねえんだよ！！

「……へんなこと聞いて悪かったな」

『いや、役に立てなくてすまん』

瑛が心底残念そうに言った。

「いや、別に良いよ。じゃあな」

俺はため息をはきながら通話を切った。

「どう？わかった？」

雑誌を読んでいた蓉子が、興味津々といった感じで瞳を輝かせながら聞いてくる。

「いや、わからなかった」

「……そっか。残念……」

悲しそつに言いながら、蓉子は再びマンガを読み始めた。

さて、次は誰に電話をしようかな。他に聞けそうなやつは……あ、亜希がいたな。

トウルルルル……

『はいもしもし?』

「あ、悪い（汗）今暇かな?」

『……チツ……大丈夫ですよ』

今舌打ちしたあああ!!??

「え……本当に?」

『本当に』

じゃあ、あらためて。

「えっと……ヤングジャ。プとかのヤングって、なぜヤングなのかわかる?」

『うーん、私は基本的に少女マンガしか読まないからわかんないな。瑛くんには聞いてみた?』

「うん。そしたら『やんぐじゃ。ぶってなに?』って言われた（苦笑）」

『うふふふ、確かにそんな感じしますね』

「それじゃあ電話して悪かったな」

『うつん、またいつでも電話してね』

通話を切る。できることならもう電話は絶対にしたくないな。初級から舌打ちするとか怖すぎだし。

次は……真琴にするかな？真琴なら弟がいたきがしたから期待できるかな？

トゥルルルル……

『よう一宏！元気にしてるかい♪今日はまさか愛の告白！？待って！今はまだ心の準備が……』

こいつ妄想族にもほどがあるだろ！？

「ちやうちやう！お前確か弟がいたよな？」

『ああ、拓磨のこと？拓磨がどうかしたの？』

そういえば真琴の弟って拓磨って名前だったなあ。俺ずっと篠崎弟って呼んでたからわからなかったよ。あいつは真琴に似てハイテンションだからなあ。一番最初にあいつと会話した内容は『生まれて始めて両親のヤッているすがたを見た時の思春期の少年の心境について』だったから。ちなみに篠崎弟はうちの1コ下だ。

「あのさ。ヤングジャ。プなどがなぜヤングとついているか分かる

か？」

『うん……うちは週間少年の方だからわかんないな』

「そうか。わざわざ悪かったな」

『うん。こっちこそ役に立てなくてごめんね』

また電話を切る。いよいよ電話をするやつが減ってきたな。あと他には……ん？いたじゃん！一番適任な人が！

俺はアドレス帳からある人物に電話をかけた。

トゥルルルル……

『おっすかつちゃん』どしたの？』

そのある人物とは、俺の中で最も濃い人物であるこの人だった。

「お久しぶり静音さん。相変わらず元気？」

『おうともさ』エブリデイ元気だよ！それで、どうしたのさ？』

やっぱりこの人は元気だなあ。今は駅前で一人暮らしをしながら有名な道場で働いてるんだっけか？確か静音さんはテコンドーの達人だった気がする。

「いえ、実はさっきからヤングジャ。プなどはなぜ最初にヤングがついてるのか気になってるんだけど……わかる？」

『うん、確信じゃないから難しいけど、それって単に週刊少年よりもグレードアップした感じがしてカッコ良いネーミングだからじゃない?』

そんな理由だったのか!? 案外簡単な結末だったな。

「ありがとうございます(汗)これで答えが出たよ」

『いやいや、あたしも役に立って良かったよ。そうだ!こんどうちに遊びに来ない?久しぶりに格ゲー勝負しよ!』

ああ、そういえばここ何年か対戦してなかったな。よし、今から特訓しなきゃな!!

「いいよ!じゃあ、後日連絡するね」

『おうよ。それじゃあ、またね〜ん』

俺は耳から受話器を外すと電話を切った。よし!これで答えが出たぞ!

「蓉子!ヤングジャ。プの答えが出たぞ!」

「え?なんですかそれ?」

「いや……………なにそれって言われても……」

お前が聞けって言ったんじゃないかよ。

「ああ、あれですか。なんかもう飽きたんでどうでもいいですよ」

ああそうかい。つまり俺の努力と優しさは無駄だったわけだな。
……いや、そうでもないか。ようやく静音さんが登場できたわけだ
からな。良かった良かった……のか？

11話[♂] ああ……また新キャラ？（前書き）

更新遅れてすみません（涙）

引き続き、評価感想等おまちしてまゝす！

11話♂ ああ……また新キャラ？

——蓉子が来てから丁度1ヶ月が過ぎた頃。

最近学校にも毎日通っていて、大分クラスにも慣れてきた。まだ女子とは亜希くらいとしか話せないが、男子では隆之助や瑛を中心として大分仲良くなった。

突然だが、俺は今球技大会をやっている。

うちの学校は他の学校とは違って、1学期に行うのではなく2学期に行うちよつと不思議な学校なのだ。

ちなみに俺は男女混合野球に出場していて、ポジションはピッチャーだ。なぜ俺みたいなやつがこんなことをしているのかというと、それにはこんな理由がある。

その1、この球技大会では野球部員を2人まで（ちなみに1クラスに3人ほどうる）助っ人にいれることができるのだが、ピッチャーとして参加させることができないのだ。その2、俺はこう見えて中学生の頃は野球部でピッチャーだったから。まあ、実績は県大会ベスト8止まり。そして、その3、これが一番の理由だろう。『なんかいかちいから』だそうだ。なんだそりゃ？

そして今は俺たちのクラスの攻撃。

6回の裏、0対6、バッターは9番ピッチャーで俺である。

正直にいつてピンチだ。

相手のピッチャーは蓉子。

普通に考えてこの状態は有利なのだが、このピッチャーにはそんな常識は通用しない。なぜなら……この回まで150キロを上回る豪速球を投げ全て三振し、攻撃では6点の中の4点はホームランを打

ってチームを導いている。やつは既に7回打席に立っているのだが、正直、やつを一度アウトに出来たのが俺自身かなり驚いている。おっと、こんな場合ではない。打席に早く立たなければ。

「おやつ！ようやく立ちましたね」

アハハハハ。随分嬉しそうに言ってくれるじゃないか。俺はさっきから膝がガクガク震えて涙が止まらないよ……

「それじゃあ一宏さん……行きますよー！」

身体を捻り始める蓉子。通常の選手ならすでに投げ始める位置まで捻ってもなお捻っていく。気が付けば完全に上半身が後ろに向いていた。間違いない。トルネード投法だ。そして――

ゴウウウウウン！……………ズドン！

「ストライーク！」

……………これが蓉子の球です。その名も五光烈花。やつの投球を見ていると某野球マンガに出てくるバンダナをしたあの人が重なってくる。ていうか本当に女子か？

「フッフッフーン」どうです一宏さん！この私の投球は？」

ああ、凄いよ。出来ることならばそそくさとベンチスタンドに戻りたいところだ。

2投目。今度は思い切ってバットを振ってみる。もちろん――

「ストライクツー！」

——である。当たり前だ、こんな球俺みたいな県大会止まりが打てるハズがない。

もう後がない。どうする！？

「審判！タイム！」

不意に、瑛が審判にタイムを呼びかけ、バッターボックス付近まで来る。

「一宏、耳を貸せ」

ん?

俺は瑛に言われた通り耳を瑛に向ける。

「いいか？わたしから言えるアドバイスはこれだけだ。………思いっきり振れ！」

アドバイスになってねええええ！！！？？？

そして僕はこれだけ言っと、またベンチスタンドに戻っていった。

「作戦タイムはこれで終わりですか？ それじゃあ一宏さん！ これでアウトです！」

またしても振り被る蓉子。どうする! ? どうするよ! ?

ええ〜い！！ここはもう捨て身でバントだ！！

俺は意を決してバントの構えを取った！

《その頃》

みなさん、初めまして♪僕はオタク&引きこもり更正委員会から来た石垣美晞いしがきみけっています♪美花ちゃんって呼んで下さいね♪ちなみに僕は猫の妖怪です！

突然ですが、僕は今清風高校の野球場のバッターボックスから10メートル近く後ろにある木の上にいます！理由は、いつになっても委員会に戻って来ない蓉子と、その以来人である冴木一宏の様子を見に来たからです。

見た感じ、二人とも明らかに高校生活をエンジョイしていますね。僕は仕事をしているのに蓉子は遊んでいるなんて大変ムカつきます！これは後で蓉子をお仕置きしなければなりませんね！！

「ストライークツー！」

蓉子が球を投げ、一宏が見事空振りをしたようだ。当たり前だ、彼女は人間ではないのだから身体能力は並外れているのだ。

そして、タイムをとって一宏と男子が話し合い、また試合が再開する。

「作戦タイムはこれで終わりですか？それじゃあ一宏さん！これでアウトです！」

そして、いよいよ三球目を投げた蓉子。そして後の無くなった一宏がとった行動は——バントだ！

ガキン！

マグレか否か、見事バットに当たるボール。しかし、その球は前に飛ぶことはなく、凄まじい速度で後ろに――！？

《視点は戻り―宏視点》

やった！当たった！正直かなりの賭けだったから心配だったんだが、当たって良かった！……あれ！？球が前に飛んでない……まさか！後ろか！？

俺は急いで後ろを見る。俺の場所から少し後ろに木があるのだが、そこに向かって物凄い速さで飛んでいった。

ゴッソ！

「いでっ！？」

ズデーン！！

球に当たって女の子が落ちてきたー！！！？

「いっててててて……」

頭とお尻をさする少女。その姿をみて啞然とする一同。

「あなた……美晞！？」

ただ一人、蓉子の声だけがグランドの中心で聞こえるのであった。

12話[♂]ニャンニャン、ニャンコ（前書き）

感想、評価ありがとう！気が付けば、読者数がとっくに10000を突破していました！びっくりです！

感想お待ちしております！

12話♂ニャンニャン、ニャンコ

現在、球技大会が終わり放課後である。

野球の結果は見事な惨敗、7回の裏10対0のワールド負けだった。はあ、試合の結果なんて読者さんも俺自身もぶっちゃけどうでもいい。

俺たちが先ほどから気になっているもの、それは突然木から落ちてきた謎の少女のことである。彼女は一体誰だったのだろうか？蓉子と知り合いらしいのだが……。ちなみに、蓉子は7回終了後のその少女を連れてそそくさと保険室へ行ってしまった。俺も今球技大会の片付けを終えたため、これから蓉子とその少女に会うべく保険室に向かっているところである。

保険室に着くと、俺は扉を開けて中に入った。入って正面右に先生のテーブルと椅子、その横には薬品棚、正面左にはベッドが3つカーテンで仕切られながら並べられている。その一番左のカーテンを開けると、そこには眠る先ほどの少女を見守っている蓉子の姿があった。

「なあ、蓉子」

俺は蓉子の隣に座りながら言った。

「……………なんですか？」

蓉子は少女から視線を外すことなく返事をする。

「彼女は……………一体誰なんだ？」

「……この子は美咲。オタク&引きこもり更正委員会のメンバーです」

なるほど、だから知っているわけだ。

「しかし、なぜこんな場所に？」

「おそらく……私の様子を見に来たのでしょう。本来なら、1ヶ月もあればオタクを更正出来ているはずなのに、私が委員会に一向に戻ってこないから……」

なるほど、それならばなっとくがいくな。……ていうか、そういえばこいつそれが目的で俺のところに来たんじゃなかったのか！？

「じゃあ……お前は帰っちまうのか？」

「……………」

答えようとはせず、唇を噛んで少女を見つめ続ける蓉子。俺もなんだが気まづくなったのでその少女を見ることにした。

身長は160くらいで、なぜか忍者服。髪は銀色で少しボサボサなショートヘアである。また、瞳は二重で大きく（閉じたままなので正しくは言えんが）、鼻は小さめの形良しと言った感じだ。

「ん……うん!？」

ガバツと起き上がる美咲。辺りをキョロキョロと見回し、視界に入った蓉子のことを見つめる。

「目……覚めました？」

心配そうな声で問いかける蓉子。しかし、表情は至って真剣そのものである。

「う…うん。……あのさ、実は僕——」

「偵察に来たんですね。私の帰りが遅いから」

途端、真剣になる美晞。蓉子の瞳をまっすぐに見つめあっている。

「うん、そうだよ」

「そうなん…ですか…」

蓉子はようやく美晞との視線を外すと、そんな返事をしながら深いため息をついた。

「はい……。それで、経過はどうなの？」

「う…ん、正直厳しいかな。まずはお互いを知らなきゃいけないし、人間の生活パターンを知るためにはその人と同じ生活を送らなければいけませんから」

「そうなんだ…：…んん！？ああ、なるほど！だから先ほども生徒の皆さんと野球をして交流を深めていたんだね！？」

さあ、なんと純粋な返答だぞ。どうするんだ？

「えゝうん、まあゝそんな感じですよゝおほほほほほ！」

ああゝ辛い！辛いぞ蓉子、さあどうだ！？

「先輩、凄いよゝ」

こいつバカだ！？蓉子の話を信じちゃってるよ！？

「それじゃあ一宏さん、美晞と自己紹介してください！」

元気だなあこいつ。ああ、戦力が増えて嬉しいからか。

「俺、冴木一宏。よろしくね！」

「うん、知ってるよ。私は石垣美晞！よろしくゝ一宏お兄ちゃんって呼ぶね！」

握手をする俺と美晞。ああ、お兄ちゃん。なんと美しい響きなのだろう。これを聞いているだけで、ご飯10杯はいけるだろう。

「それじゃあ、二人で頑張つて一宏さんの中にある負のオーラ^{オタク}を浄化させてみせましょう！」

「はい！」

こうして、物事はいとも簡単に運ばれていくのだった。

《その後の会話》

「ところで美晞、こちらの住む場所はどうするのですか？」

蓉子が不思議そうに人差し指を顎に当てながら言った。

「そんなの決まってるじゃない！—宏お兄ちゃんの家に住むの！」

「ああ、そうでしたね！忘れていました！」

「…………俺の意見は無いのか？」

13話♂白濁色…（前書き）

今回は下ネタ濃いめです！未成年は気をつけてね！

13話♂白濁色…

いつもの朝。正確にはいつものメンバーに美晞が加わり、より濃くなった俺たちはいつものように学校に到着すると、上履きを履くべく下駄箱へと向かう。

「また…いっぱい入ってるな」

瑛が頭を押さえながら言う。

「ああ、…そうだな」

俺も同じようにして言った。

俺たちが下駄箱で見た光景とは、ロッカーに大量に入れられた手紙である。瑛の場合、それはラブレターであるのだが、俺の場合はそんな喜ばしい物ではない。それは…

「なにそれ？……果たし状！？」

美晞が俺の下駄箱から一枚の手紙を手に取り、表を見て言った。そう、果たし状なのだ。なぜ果たし状なんてまがまがしい物が入っているのかというと、そんなのは簡単な理由である。

その1！俺が男子のアイドル真琴、蓉子といつも一緒にいるから。

その2！女子からの憧れの的である瑛と一緒にいるから。

そしてその3！美晞の出現により俺と行動する女子が増えたこと

による怨み。

以上、この3つが令に挙げられる。いい加減にして欲しいものだ。もちろん果たし合いにも行かないし手紙も読まない。しかし差出人の名前を見るのは別だ。差出人名は見ておかないとなんか落ち着かない……というか『もしかしたらラブレターあるかも!』という期待を僅かながらに持ち合わせているからなわけだ。

一枚一枚見ていく……やはり女の子のラブレターはなかったようだ。

「なあ一宏、これはなんだ？」

瑛が下駄箱の中からなにか瓶のような物を取り出した。

「ん? どうした？」

俺はその瓶を見つめる。中には何やら白いものが満タンに入っているのだが……まさか!?

「これは牛乳か？」

瑛がなんともいえない顔をしながら瓶を揺さぶる。やめろ! 違うぞそれは! 明らかに固体だろ!?

「捨ててきなさい」

俺は瑛の肩を掴みながら真剣な表情で言った。

「いやしかし、せつかくの貰い物を『いいから!』……うむむ、わ

かった」

残念そうに瓶をゴミ箱に捨てる。さて、際どい下ネタはここらへんにしよう。

「んで、さっきの瓶は誰からだったんだ？」

「うむ、確か2年2組の秋庭萌之助とかいうやつからだな」

ああ、名前からしてかなりアレな感じがムンムンしているな。

「どうするんだ？会ってみるのか？」

「いや……どうする？」

いや、質問に質問で返されても……

「興味が無いなら無視しちゃえよ」

「それもそうだな」

しかしこの時にもしもなんらかの手を打っていれば、この先に起こる事態を防げたのかもしれないかった。

5日後。

「これで5回目だな」

あれから毎日のように不思議な瓶と手紙が下駄箱に入っていた。そ

の中にはもちろんせい…げふん…不思議な液体が入っているのだ
た。

「……………これはもう、会ってみるしかないんじゃないか？」

「うむ、仕方あるまい」

俺の問掛けに瑛は溜め息がちにそう返事をした。意を決して、瑛は封筒を開けると手紙を読み始めた。

「なになに、『ハアハア、瑛タソお元気ですか？僕は前から貴方のことをLOVEしてました。放課後校舎裏まできてくらさい。愛しの瑛タソへ、愛を込めて…………』だそうだ」

ツツコミ所満載だあああああ！！！！？？？？

「……………本気で会うつもりか？」

「うむ…………正直気は進まないがこのように真っ直ぐな手紙を読んでしまつたら行かないわけにもいくまい」

こいつ絶対アホだろ？あの手紙の一番最初をちゃんと見たか？明らかにあれは変だろ！手紙なのに『ハアハア』から始まつてたぞ！？オマケに『タソ』かよ…………最早男につける呼び名じゃねえぞ！？完全なる同性愛者じゃねえか！？瑛はまあ、一応女だけど、中身は完全にそこら辺の男よりも漢だと俺は思う。

「まあ、頑張れや」

俺は瑛にそれだけを言うと、そそくさと教室へと向かった。

そして放課後。とうとうその時がやってきた。俺は瑛に見ているように言われたので、草むらの後ろに隠れる。なぜか俺の横には美咲と真琴と蓉子と亜希が俺と一緒に様子をうかがっている。

お！手紙の差出人が来たぞ！？

「なにあいつ、マジキモイ」

そうだな真琴。確かにキモイが俺の背中に身を寄せて胸をくっつけるのはやめてくれえええ！？おつきしちゃう！！マイブラザーがおつきしちゃうから！！

「はっ……始めましてです！」

手紙の差出人である、ぜい肉ぶとりの汗だく男が言う。

「挨拶はどうでも良い。わたしはお前とは付き合うつもりはない。それにわたしは男だ。性別的にも問題があるし、なによりお前に興味すら沸かない。よって、早くわたしの目の前から消える」

瑛はジロリとにらみつけた。怯むデブ男は震えながら言う。

「あんまりでぶ！僕は…こんなにも！こんなにも貴方を愛しているのに！」

「悪いがしつこいやつならば容赦はしない。それに……わたしにはちゃんと心に決めた人がいるのだ。だから他の人物のことなどわたしには考えられない」

「ヒソヒソ…瑛くん……まさか私のことを！？そんな…でも私も好きだし…ゴニョゴニョ…」

亜希がモジモジし始める。ああ、そういえば亜希は瑛のことが好きなんだったっけか？

「え！？亜希さんって瑛さんが好きだったんですか！？」

おいおい蓉子、今更かよ！？もっと早く気づくだる普通。

「え！？蓉子それマジで！？」

真琴さんそれマジッスか！？お前確かあいつと1年のころからの付き合いだったよな！？俺なんか先月学校に来て数分で気付いたぞ！？

「亜希ちゃん良かったね♪」

美咲が亜希の頭をなでながら言う。

「うん♪」

亜希はほつぺたを赤く染めながら嬉しそうに頷く。お！？デブがなんか喋るぞ……！？

「そうなんでぶか……。それじゃあ僕は、瑛タソを一生懸命応援するデブ！頑張って下さいデブ！」

「ああ、ありがとう。そう言って貰えると助かるよ」

「頑張つて下さいデブ。それでは、さよなら」

「ああ」

デブ男はそういうと、瑛に背を向けて走り出した。その後ろ姿は、心なしか泣いているような気がした……。

「お話、終わったぞ」

瑛は俺の元に来ると、それだけ言つて帰る準備をする。

「ああ、そうだな。それよりお前、好きなやついるんだって？」

俺はニヤつきながら瑛に言う。途端、瑛の顔が真っ赤に染まった。

「う……うるさい！別に誰でも良いだろ！？」

「はいはい、そうですか」

俺はなおもニヤつきながら言った。

「えへへ」

そんな俺と瑛の会話を聞いていた亜希が、かなりご機嫌な顔をして瑛の前に立つ。

「大丈夫だよ、私がちゃんと受け止めてあげるから」

亜希は瑛にそう言うと、顔を真っ赤にして走って行ってしまった。

「？」

それを不思議そうな眼差しで見つめていた瑛。あれ？こいつ亜希が好きなんじゃないの？……ま、いつか。

「私たちも帰ろう」

「帰ろう」

「……帰る」

そう言つて一宏の手を引く真琴、蓉子、美晞。

「……………それもそうだな」

さて、帰るか。

「好きな人……か」

そんな一宏の姿をどこか切なそうな眼差しで瑛が見ていたのは、一宏は知らないのであった。

《後日談》

我が校にはその後『KAO』、『恋する瑛くんを応援する会』という意味不明な同好会ができたのであった。

14話 ♂ 静音さん（前書き）

いよいよだね…楽しんで読んでください♪

14話♂静音さん

それは昼食も食べ終わり、蓉子・美咲と3人でマイルームでまったりテレビを見ているときだった。

『桜舞い散るゝ今日ゝの二人流しゝたなゝみだゝはゝ』

ん？この着信は俺のケータイか？しかも電話みたいだな。

『窓に映るゝ景色は時とともにゝ変わゝるけゝどゝ』ピッ！』

「もしもし？」

『あ、もしもしかっちゃん？ヤッホー』

随分久しぶりの登場ですね静音さん。まあ、静音さんは既にこの物語ではなくてはならない存在になってるだろうけどな。

「んで、今日は何の用事なんすか？」

出来れば今日はゆっくりまったりしていたいのですが？

『なにつて、この前一緒に遊ぼうって約束したばっかじゃん！もしかして、忘れてたの？』

やべ！？約束のことすっかり忘れてた！？

「わっ、忘れてたなんかないデスヨ？」

『うぬぬぬぬ…』

やべ！？受話器越しに唸ってるよ！？

「すんません、本当は忘れてました」

『うむ。正直に話したので許してつかわそう！』

「…ありがとうございます」

やっぱりこの人と会話をするとなんだか気が狂うんだよね…。

『それでさ、かつちゃん！この後大至急私んち来れる？』

ん？？どうだろう？エロゲーはインストールしたあとにインストールしてないって蓉子と美晞に言っているから困ることなんてないし、別に大丈夫かな？

「了解しました。今から向かいますよ」

『あいよっ、んじゃあ、まってるねん、ガチャッ、ツー、ツー、ツ
ー』

さあ、じゃあ着替えて静音さんちでも行きますかあ。

「蓉子、美晞！ちよっと出掛けてくるから」

「「はいはい」」

蓉子と美咲はテレビを真剣に見ていたため、こちらに向くことなく流す感じで返事をした。ちなみに、今二人が見ているのは『必見！気になるあの動物！』という番組の『ゴリラの交尾について』を見ている。それはもう食い入るように。お陰でさっきから俺の部屋ではウホウホ声が流れている。正直な話し気持ち悪いな。

「行つてきまーす」

「「はい」「」

なぜんなもんを真剣に見ているんだ？

そんなことを考えながら、俺は我が家を後にした。

さて、静音さんちはどこら辺だったっけ？確か我が家から数キロバイク（一応免許を持っている）で行くと駅があるから、そこから探すか。

さて、駅に着いたぞ。確か俺の記憶では駅前の道を西に真っ直ぐ行くと着いた気がしたんだよね………あつた！そこはまだ建てられてから新しいアパートらしく、名前は『長月荘』というようだ。

俺は一階から鬼島静音の表札を探す………あつた！

静音さんの部屋は二階の左から二番目の部屋だった。

コン、コン

念のためノックを試みる。まあ、一応他人んちだからな。当然の配慮だろう。

『いませんよー!』

そうか、今外出してるのか……え？今明らかに返事が返ってきたよな？

コン、コン

もう一度ノックをする。

『だからいないってばー!』

いやいや、明らかに御在宅中ですよね!？今時そんなベタな居留守ありえねえよ!？

ゴンゴンゴンゴンゴン!

ガチャッ!

「だからいねえつつつてんだろてめえ!………なんだ、かつちゃんじゃ」

鬼の形相でドアを開けたあと、俺の存在に気づき直ぐに笑顔になる静音さん。なぜ居留守なんぞを？

「……借金取りにでも追われてたんすか？」

人差し指をアゴに当てながら静音さんが言う。

静音さんの特徴は、髪は緑色の背中まである長髪、前髪は斜め分けをしていて常にピンクの花びらのような飾りを付けたヘアピンをしている。

本人いわく、馴染みあり着る服を決めるのが面倒くさいからだそう
だ。

うではなく、

極めて普通の胸である。本人いわくCカップだそうだ。とまあ、あの程度紹介が終わったところで本編に戻ろうか。

「んつとねえ、今日はゲームセンターに行こうと思ってるのよ。新しいアーケードゲームが入ったから久々にちが騒いじゃってさ。」

「いっすよ、別に」

「ほんと！？やった♪ かつちゃんありがとう！」

そう言っ て抱きついてくる静音さん。別に抱きついてもいいから、胸を顔に押し付けられないで！ 静まれ！ 静まれマイサンよ！ 君はにまだ優しい子でいて欲しいんだ！ 他の女性にウツツを抜かすな！ 君には右手という心に決めた人（？）がいるじゃないか！

数分すると、ようやく胸から離された。やはり大きさよりもそこに胸があるということが男性にとってかなり刺激があるわけだ。

「それじゃあ静音さん。行きますか？」

「うん！」

嬉しそうに俺の手を握り、元氣良くブンブンと腕を振る静音さん。本当に嬉しいみたいだな。

数時間後……………

「あゝ楽しかった♪」

ゲームセンターを十分に満喫した俺たちは、現在ゲームセンターの扉を開け外に出ている。

「そうつすね」

今日はほとんど対戦ゲームばかりだったな。しかも俺の惨敗。さすがにこの人は強いな。そして、最後にうさばらしにクレーンゲームで人形を取りまくった。もちろん、蓉子と美晞へのお土産である。

そういえば、今の時間は何時だろ？

そんなことを考えながら静音さんと雑談をしながら歩いた。

ふと、帰り道にある橋に目がいった。時刻は夕方6時、当たりがくらくなりはじめるなか、夕焼けを背に一人の少年が手摺に立っていた……はい！？おいおい、これってまずいんじゃない？あのかきもしかして飛び下りるつもりじゃないだろうな！？

「かつちゃん！！あれ！！」

静音さんもどうやら気付いたようだ。

俺と静音さんは焦る気持ちを胸に、少年の元へと駆けていくのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7181b/>

おたく 一直線！

2010年11月6日14時05分発行